

# 武田 博允



## 新しいことは 一人の人間の 熱狂から始まる

「おとなはだれも、はじめは子どもだった。しかし、そのことを忘れずにいるおとなはいくらもない。」「星の王子さま」の著者、サン＝テグジュペリがこの書物の冒頭で親友レオン・ウエルトに捧げた献辞の中の言葉です。今回ご紹介するのはそんな、いくらいもないおとな「武田博允さん」です。

跡を追います。

武田さんが本格的に昆虫の虜になったのは高校の時に生物部に入部し、理科室で数々の昆虫の標本を見た時でした。中でも蝶の標本には目を奪われました。

自然がデザインした紋様の美しさ、珍しさ。種による違いの不思議に心打たれました。更に楽しかったのは各種の蝶の生息分布を調べることでした。近畿の山野を歩きまわりました。特に日本では年間数匹しか採取出来ないといわれた幻の蝶「ヒサマツドリ」を探し求めて歩きました。就職してからも続け、結婚しても新

少年時代の武田さんは昆虫大好き少年で、山で知り合った手塚治虫さん（漫画家）と虫を追っかけ走りまわったそうです。そんな昆虫少年武田さんが人生の後半を費やして取り組んだ「まちづくり」……狭山池をシンボルに水と自然を生かしたまちをつくりたいと、1400年の歴史を持つ狭山池を「まつり」というパフォーマンスを起こす事で現代に蘇らせ、池をめぐる自然環境を巧みに取り込んで蝶やホタルの飛び交う舞台を造るなど、自由な発想と驚くべき行動力で地域の人々と共に築いてきた「まちづくり」の軌

婚旅行から帰るとその翌日からもう採集に出かけるという熱心さ。幼虫も家で飼育していたので、ある夜「ギャッ!!」という叫び声に飛び起きると、蝶の幼虫が夫人の頬を這っていたそうです。

職場は住友系の金属鉄鋼の会社で鉄塔や石油のパイプラインに使用する金属のパイプを作る技師として働きましたが、仕事が忙しくなり、遂には山歩きも蝶探しの時間も無くなり、夢は途絶えました。

そして昭和52年に大阪狭山に住居を持って10年、昭和62年に63歳で会社を退社します。その



起こそう、といっても何をする……みんなが集まって参加したり見物したり心にかかっているもの……それは「まつり」だと感じた武田さん、自らがリードして市や商工会に働きかけ、市民も巻き込んで「狭山池まつり」実行委員会を組織し、平成14年4月、舞台構成から演出まで手がけ第一回狭山池まつりを開催しました。

それを安藤忠雄氏が評価し、狭山池の堤に桜の木を植えることを提案、自らも苗木を寄付、市民も参加して植樹をし桜の堤が生まれました。木が育ち、花の咲くのと共に狭山池は多くの人々に知られるところとなり、周囲の自然環境も学ぶこととなり、それが「バタフライガーデン」に繋がっていきます。



シルビアシジミ(絶滅危惧種1類)

平成17年、狭山池の西側の堤の一角の自然林に大阪府の絶滅危惧リストに指定されている蝶、「シルビアシジミ」が発見されました。

これが武田さんの蝶への思いを呼び覚ました。「この蝶を守り狭山池の自然環境を充実させ、池を訪れる人たちに四季折々の花と共に、そこに舞う数々の蝶の姿を楽しんでもらおう。それはまた子どもたちが自然を学び愛する教育の場にもなる。」とその場にバタ



ジャコウアゲハ

武田さんを待ち構えていたのが地元の人たちです。早速自治会長にと乞われます。かねてから人生の後半を自分の住む町のボランティアで過ごそうと考えていた武田さん、引き受けたのが13年の長きに及びました。その間地域に合唱団を作ったり、一から音楽を勉強しておやじバンドを作ったり文化活動にも力を入れます。昭和57年の大水害の後、昭和63年から開始された狭山池の大改修は平成14年に完成し、安藤忠雄氏の設計による狭山池博物館も出来上がり、池の構造の歴史や堤の工学的価値を知ることとなります。しかし、市の北西部に造成されたニュータウンの人々はあまり狭山池のことは知らず、そこで武田さんは考えました。池をコンセプトに何かイベントを



写真提供: 大阪狭山市





取材を終えて武田さんとバタフライガーデンに向かいました。池は静かで中ほどの浮き島に水鳥が二羽休んでいました。ゲート近くに立つ百日紅の濃い赤紫が、ブツドレアの藤色とマッチして美しく、フェンス一面に咲くキバナコスモスのオレンジ色が秋の彩りを見せ、その中にぼつんとミヤコグサが可憐でした。背景に広がるクヌギとエノキの林の中を水色の小さな蝶がちらちらと見え隠れしていました。フェンスにもたれ満足そうな武田さん。その時一匹の蝶が飛んでき



て武田さんの背にそっと留まりしばらくじっとしていて飛び去りました。武田さんは気付かずじまいました。



バタフライガーデン全景

この頃武田さんはもう一つ貴重な仕事をします。自治会長をしていた武田さん宅に近所の家の中でタバコを吸えなくなった族たちがやってきて西除川の川原で何か光っているというので見に行くと、何とそれはホテルでした。狭山池平成の大改修で埋め立てられることになっていった旧西除川の河川にホテルが生息していることが判ったのです。そこで「人と自然博物館」の八木先生に鑑定してもらおうと絶滅寸前の「ヒメボタル」と判明しました。武田さんはこのままでは完全な保護が出来ないと富田林土木事務所（大阪府）と何度も交渉を重ね、このヒメボタルの生息する河川敷を保護区とすることに尽力し決定を見ます。平成17年「**狭山ヒメボタルを守る会**」を発足させ河川敷に遊歩道を作り、鑑賞者を招くなど、大阪狭山のホテルのPRに努めます。そして今やホテルは毎年5月から発生しはじめ、ピークは5月下旬から6月上旬。その数は2700匹から3300匹。飛び交う淡い光の点滅はまさに夏の夜の風物詩です。



武田博允、昭和6年2月10日生れ、八拾九歳。狭山池まつり、バタフライガーデン、狭山ヒメボタルを守る会と地元自然环境を保護し、大阪狭山市を水と自然の豊かな町にすることを第二の人生と決め、その姿を発想しその実現のため住民と力を合わせて行動してきた熱狂の人「夢人」なのです。⑤



[主な表彰歴]

- 平成18年 大阪狭山市表彰（功労者表彰・自治功労の部）
- 平成20年 大阪府表彰（地域活動功労賞）
- 平成23年 大阪狭山市教育委員会表彰（文化教育功労者表彰）
- 平成26年 大阪府みどりの功労者表彰（自然環境の保全・団体）
- 平成29年 大阪府表彰（河川愛護功労賞）



ホテルの生息地